

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	血の絃：新体詩：文苑
Author(s)	江中，紫秋
Citation	龍南會雜誌， 1 2 7： 5 2 - 5 4
Issue date	1908-11-03
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6170
Right	

血の経

江中紫秋

一、あゝ君いづち

卯月の光りみちわたる初花野邊の

揚雲雀うたふころにときめくを。

まひる花瓶さゝげもち

あゝ君いづち尋めてゆく。

さつき夕べの黄金雲たなびく森の

無果花に昨われ花環かけたまぬ。

今日を花瓶さゝげもち

あゝ君いづち尋めてゆく。

河馬も嘯く眞夏どき大野が原の

地平より銅の雲たちのぼる。

まひる花瓶さゝげもち

あゝ君いづち尋めてゆく。

五十二

黄どくれなゐの鶏頭花、精舎の庭に

晩夏のキオロン樂ぞかきならす。

今日を花瓶さゝげもち

あゝ君いづち尋めてゆく。

黄金の足穂かりたふす鋭鎌のひかり

きらめきて落穂拾ひの豊の歌。

まゐる花瓶さゝげもち

あゝ君いづち尋めてゆく。

浮彫ゝるき大理石の大水盤に

晩秋の夕陽ひらめき、落葉舞ふ。

今日を花瓶さゝげもち

あゝ君いづち尋めてゆく。

君が鏡も霧ふきて今朝こそ映つれ
大寒に雪をいたゞく水仙花。

あはれ花瓶さゝげもち

あゝ君いづち尋めてゆく。

二、皐月雨

皐月空、幾千萬と數しらぬ
水母の傘の列なめて灰濁む空に
銀の日は姿を隠し幽暗の
天の岩窟に蒼ざめて惡夢にふける。

あまぬるき古錦の雲野をこめて
縦の高樹は合掌の胸くるほしく
山やまのみどりの腫したひとつ
牛の涎のそのさまに慵き涙。

このひと日、鐘を忘れし尼寺の
若き童貞、その夕、酸わてちぬる
果のれとに、心すませば池水に
噴水の音、鶴の歌、卒塔婆のうめき。

うるほへる伽藍の大氣じめくど
靄ふく鳥の音もたてず羽うちすがへば
龜の中、鎮座の佛の金箔も
うるみ連弾く打敷の呆けし花環。

雨にたつ九輪の塔の影もいま
芝を離りて蟒蛇は黒き姿ご
化相して塔の礎欄干を
捲きつゝ念ず、妄執の雨のみ經を。

あゝかゝた街のはづれの大河の、
橋の穹窿や圓蓋の旨ひし影を
濁流はもてあそぶめり。――さみだれの
地獄の釜の高笑ふさまもて流る。

三、罪業

わが海の水平線に終の日は
今こそ暮るれ。うちけぶる潮吹のあかに

血の絃のキオロン狂ひ、うちつゞく

いさゞ濱べに幻の吊臺の影――

晩秋の夕べの雲のとびすかふ

空にひゞかす罪の息、黒檀の笛。

暗愁の音に泣きぬるゝ漁火の

まろぶ火影に織りいだす罪のかすゝ

たぐへ見つ。さあれ今こゝ權の手に

落ちてくだくる波の穂の瑠璃の光を

秋の灯

高丘の社にあらぶ燈籠の灯したろがむ船の人かあ。

み腫にうつれる影を美しきはたれそれつゝ解かんともしぬ。

ほの白う蕎麥の花さく山畑の中の小家のあつかうき灯よ。

あゝ秋風人皆やせて草木あき憂ひの國ゆ吹きてきぬらん。

夕暮や銀杏ちるなり幾人の狂女唄ひつ舞ふが如くも。

木枯ややせ馬つけし荷車の急ぐかあたに大阿蘇ぞなる。

五十四

見まよれば消わては浮ふた夢ゆらに
奥に秘めたる愛樂の香ひきぎすよ。

まのあたり垂れて音なき罪業の

紋羅の帳さあれは彼方に透きて

五月雨の縦の夕虹をの色と

切愛の影映らふよ。あゝあさよ

その彩と海の香りの連弾に

罪のほだしをぬけいでゝ黄金鱈鮫。(未完)

田中 紫潮